

## 昭和の東南海地震体験談

氏名：湯川 善二(ゆかわ・ぜんじ)  
生年月日：昭和5年9月29日  
地震を体験した場所：那智勝浦町大勝浦  
当時の家族状況：父、母、姉3人、兄、弟、妹



### 1) 地震発生時の状況

当時 14 歳(中学 2 年生)当日、新宮市で試験があった。

汽車で戻ったあと、家族で食事をしていると突然「ぐらっと」大きな揺れを感じた。

家族ともども家から外に飛び出すと、近所の人たちも同じように外に飛び出しており、大きな地震が来たとざわめいていた。

家のすぐ裏に小高い山があったことから、ひとまずそこに家族全員と隣の爺さん婆さん、その孫も一緒に避難することになった。知人宅ではご主人が出兵されており母親一人で子供 4 人を連れだし避難していた事を強く憶えている。

その晩、近所の何人かはそこで寝たが自分は自宅へ戻った。

山から離れた人達はお寺で避難していた。

### 2) 津波襲来時の状況

避難後、近所のお爺さんに、海を見て来いと言われ、近くの棧橋(現在の船具店の前)まで行った。みると潮は完全に引いていた。急いで戻り、お爺さん「水無いわ！」と伝えると「無いんか！！」と言われ「無いで！」って言い返した。するとお爺さん、突然、「津波や！津波や！」と喚きだした。一体、何が起きたのか？頭の中が真っ白になりその場に立ち竦んだ。すると婆さんが大きな声で喚け！と言ってきた。何事か意味が分からないが「津波や！津波や！」と無我夢中に喚き回った。

その時に初めて津波という言葉を知った。聞いた事がなかったが津波の事を知り、観光棧橋へ行ってみた。津波はすぐに来るとは思わなかった。その場で海を見ていた。やはり水が無い、潮は引いて無かった。中ノ島方向を見ると太地行きの巡航船が航行中であった。その先のみぞのくち、中ノ島と狼煙山辺りに目を向けた。海は穏やかに見えたが徐々にその辺りから白く泡立って来るのが見えた。他の方角からも潮が押し寄せてきた。泡で白くなった津波が両方向から押し流れ込んで一本の線状になり怒涛のごとく広がり押し寄せて、まるで津波が目の中に飛込んで来る様で心に強烈な戦慄や衝撃を感じた。走って逃げた。

すでに道路脇の排水溝まで水が溢れてきた。

当時、太地の巡航船が勝浦港から出ていた。その巡航船が勝浦港、中央で二回程巡廻していた。この時、津波が見えていたのではないかと思う。この船長、もとは帆船乗りで鳴門の潮を何度も通った経験があった。もし、その技術が無かったらどうなっていたか？・・・(巡航船は無事)地震、津波後、船を岸に着け勝浦の人はそこで降ろした。(右写真 昭和 20 年頃の勝浦港)



### 3) 家族の行動・被害

裏山に避難した家族は、津波が引いた後、その日の内に帰宅することができ、家族の誰にも怪我等もなかった。

### 4) 集落・周囲の被害

入り江の奥にある法泉寺の門がなぎ倒されてあった。この門の倒壊が地震か津波によるものかは定かではない。近所で倒壊した家、流された家は 1 軒もなかった。

床上まで浸かった家は、当時、水道もなかったので井戸水を汲んで畳を洗い、干して使っていた程度で特に倒壊等で修復が必要な家もなかったとのこと。

子供 2 人が現在の築地あたりに遊びに行っているときに、津波にさらわれて亡くなった。

又、橋の近くである小母さんが赤子を抱いているときに、津波が迫って来たため、欄干につかまろうとした瞬間にその子を落としてしまった。

近所のおじさんが船の碇を操作しているとき、波の勢いで船が揺れその瞬間、海に投げ出されてしまった。津波は那智の浜から那智中学校のあたりまで押し込んできた後、天満駅を直撃し、天満と勝浦間の線路がもぎ取られてしまった。電報電話局の近くの線路際に東花園という花屋さんがあり、当時そこは製材所であった。その側に相撲の土俵小屋があり、その屋根には人が乗っていて現在の那智勝浦町役場の方に流されてしまった。

### 5) 地震・津波後の生活

家は山の側にあり一段、二段程高かった為、浸水せず、損壊箇所もなかった通常どおり生活することができた。前の家も浸からなかった。

### 6) 次の災害への備え

災害の防御として、行政にばかり頼らず、自分で逃げ道を確保しておくのが基本であり、自分のことは自分で守る意識が重要だ。また各、地域によって避難状況が違うので地震が起きた場所で慌てず落ち着いて行動する。